福島

復興に向けて歩み続ける浜通りの今を訪ねて

れる「会津」の3つのエリアがある。なかでも浜通りは、地震動に加えて、大津波の影響で甚大な被害を受けた。

現在、浜通りでは、住宅や公共施設などの建物が再建され、高速道路や国道、鉄道、港湾などの整備も着実に進行。新しいまちには徐々に住民が戻り、産業や経済、観光面の復興と共に、未来の地域づくりをテーマにした新たな事業への取り組みも進められているようだ。

特に、東京から仙台までをつなぐ常磐（じょうばん）自動車道の工事は、震災で一時中断されたが、2015年に全線開通。2021年6月13日には、いわき中央ICから広野ICの約27kmが4車線化された。また同年4月24日には、常磐自動車道を横軸で結ぶ約45kmの相馬福島道路も全線開通。浜通り北部と内陸部の距離が縮まり、相馬港を中心とした物流や人的交流、広域観光の活性化が期待されている。

震災後10年を経て、インフラが整備されて地域が復興し、人々がどのような生活を送っているのか。その想いや願いに耳を傾け、浜通りの今をこの目で確かめてみたい。ニュースを観る中でそんな想いが強くなり、いわき市を起点に常磐自動車道を北上する旅の計画を立てた。当初は春先に訪問する予定だったが、新型コロナ感染拡大の影響で実行できず、感染が収まった11月にようやく実現できた。

▼ **小名浜マリンブリッジ（臨港道路橋）**
5径間連続PCエクストラドーズド橋を含む全長927m。長期の健全性の確保を目的に斜材ケーブルは多重防食構造とし、目視点検を補助するために主塔へのマーキングを設置して円滑な維持管理にも配慮した。土木学会田中賞受賞。

津波から人々を守る多重防御 防災緑地は地域の交流の場に

いわき市は、福島県の東南部に位置し、南端は茨城県に接する。東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、通年にわたり温暖な気候に恵まれている。東京からJR常磐線特急ひたちを利用して約2時間。泉駅に到着して改札を出ると空は晴れわたり、暖かな陽気に足取りも軽くなった。

泉駅から国道6号線を経由して15分ほど車を走らせると、雄大な弧を描く岩間海岸が見えてきた。海岸線に沿って県道が通り、道の海側には約1㎞にわたり岩間防災緑地が造られている。ここが最初の目的地だ。

岩間地区には県道に沿って防潮堤が築造され、長年にわたり水害から人々を守ってきた。しかし、東日本大震災による津波は防潮堤や県道を超え、多くの家屋が全壊や半壊の被害に遭った。そのため、新たな防潮堤では高さを6・2mから7・2mにかさ上げするとともに、陸側には、防潮堤と一体となった盛土を設け、そこに約2万本ものクロマツやクヌギの苗を植栽。仮に防潮堤を乗り越えるような巨大津波が押し寄せた場合にも耐えられるよう粘り強い構造にするとともに、将来的にはこれらの植林と一体となった防災緑地が、防潮堤の安全性を向上させるだけでなく、新たな美しい景観を生み出し、地域の交流拠点となることが期待されている。また防潮堤の内側の道路も可能な限り盛土構造で再建されており、巨大津波が防潮堤を乗り越えた場合にも中心地域への津波の侵入を防ぐ多重防御の考え方が採用された。

防災緑地に整備された遊歩道をゆっくりと歩いていると巨大な卵型のモニュメントがあった。これは大震災の記憶を後世に伝えるための記念碑「きみと」。この下にはタイムカプセルが埋められ、震災から20年後に開けられるそうだ。そのころには松も緑豊かに育ち、子どもたちは大人になり、再会を喜び合うだろう。

▲ 津波で倒れた防潮堤のモニュメント

▲ モニュメント「きみと」
卵型の形状で孵化を待つ生命の力強さと震災から立ち上がる人々への希望を表している。「きみと」という名称は、地域の小学生が応募により「私たちの(き)記憶を(み)未来に(と)共に届ける」の願いがこめられ名づけられた。

国際物流の復興を担う 小名浜マリンブリッジ

いわき市には、国内有数の産出量を誇った常磐炭田があり、江戸時代末期から昭和初期にかけて炭鉱業が栄え、時代とともに工業、観光業へと転換していった。産業の発展を支えてきたのが、国際バルク戦略港湾に選定される小名浜港だ。震災後、国際物流ターミナル整備事業が進められ、約54haの人工島に国際バルクターミナルを建設し、その人工島と小名浜港を結ぶ小名浜マリンブリッジが2017年に完成した。2020年10月には、国際バルクターミナルの供用が開始され、世界最大級のバルク運搬船の着岸が可能となり、効率的かつ安定的なバルク輸送を実現している。

小名浜マリンブリッジには、航路幅と高さを確保する観点から桁高を

(出典:国土交通省東北地方整備局HP)

▲▶ 岩間防災緑地
延長約1km、幅約16〜80m、面積3.9haの防災緑地。かさ上げした堤防と海岸防災林、道路を一体化した多重防御にすることで総合的な防災力を向上させた。

抑え、支間を長くできるPCエクストラドーズド橋が採用されている。PCエクストラドーズド橋は、景観面に優れ、主塔の高さも斜張橋より低くできることが特徴。地域の人々に勇気と希望を与えるようV字にデザインされた主塔を持つ橋は、今後、小名浜港を中心とした復興のシンボルとなることが期待されている。

震災の記憶と教訓を伝える いわき震災伝承みらい館

震災により東日本の太平洋沿岸は、約500㎞にもおよぶ広範囲が甚大な被害を受けた。被災地では、各地の被災状況や教訓を後世へと伝えていく震災伝承施設が開設されている。

「いわき震災伝承みらい館」は、県内や関東圏の小・中学校から、防災教育の一環として校外学習や修学旅行で利用されており、これまでに200校以上を受け入れてきたそうだ。現在の取り組みについて、同施設に勤務する武田真一さんに話をうかがった。

「2020年5月に開館して1年半が経ちます。震災後、県やいわき市が教育旅行の誘致に力を入れて旅行会社や教育機関へアプローチを進めるなか、当館では来館する学校のニーズに合わせ、当館の見学だけではなく、震災後に沿岸部に整備された防災緑地や防災複合施設の見学、年齢層別の防災学習DVD視聴など、学習効果を高めるためのプログラムを提案しています」

特に、語り部が自身の震災体験や教訓、災害への備えを話しながら被災地を案内する見学ツアーは好評を得ているそうだ。武田さんは「災害は、誰にでも平等にやってきます。震災では、突然の出来事に命を守るための正しい判断ができずに亡くなった方、命が守れても家や職を失ってしまった方もいます。二度と同じ悲劇を繰り返さないよう、来館された方には、いわき市が経験した震災が他人事ではなく、自分の身近でも起こり得る事として、その教訓を活かしてほしいと思います」と強く主張する。

▲ いわき震災伝承みらい館
館内の展示室には震災直後から現在に至るまでを時系列で紹介したパネルや映像、災害や避難所生活などを学ぶタッチパネルなどを展示・公開。年間来場者は約3万人にものぼる。(写真提供:いわき震災伝承みらい館)

復興の状況を聞くと、東京から仙台までを南北につなぐ常磐自動車道、福島を東西に横断する相馬福島道路の開通により、人の動きが活性化し、復興の大きなきっかけになっていると語る。

「一方、新たな道路が整備されても、肝心の被災地に立ち寄る場所や魅力がなければ単なる通過点となってしまい、地域経済の復興になかなか結び付かないという実態もあります。

いわき市を含む沿岸部の浜通りにおいては、新型コロナによる影響を受ける前の2019年と比較して現在、観光客数は7割程度の回復に留まっています。道路の整備などにより、新たな人やモノの動きが生まれつつあるものの、裾野が広い観光産業においては未だ復興道半ばといった現状です」

いわき市では、「常磐もの」をはじめとする自慢の食や、幅広い年齢層の方が楽しめる観光コンテンツを磨きあげて充実を図ると同時に、防災教育やサイクリングといった新たな魅力を発信することで、総合的に楽しめるまちづくりを推進しているそうだ。

ちなみに「常磐もの」とは、いわき市沖などで獲れた水産物のこと。福島の海には、黒潮の暖流と親潮の寒流が交わる豊かな漁場が広がり、ここで獲れた魚は昔から築地市場などの水産関係者の間で高く評価され、地域の人たちも誇りを持っていた。そこで2015年10月から地域ブランドとして認定し、そのおいしさや魅力を広く伝えるためにプロモーションを展開。認知度アップや消費拡大を図っている。

同館を見学したのち、福島の食を味わうために、いわき駅近くで夕食をとることにした。お刺身や焼きもの、天ぷらは、どれも肉厚で身がしまり、口の中に広がる濃厚な味わいと脂の旨みが何ともいえない。地元ならではの贅沢な食を堪能して1日目の旅を締めくくった。

▲ 水産ブランド「常磐もの」
寒流と暖流がぶつかるいわき市沖などで獲れた「常磐もの」は、全国有数の水産ブランド。地元では、その日に水揚げされた新鮮な魚を使った料理を味わえる。

▲ 仁井田川橋
橋長438m。PRC2径間連続波形鋼板ウェブラーメン箱桁とPRC8径間連続2主版桁を採用。波形鋼板ウェブは、主桁自重の軽減により下部構造をスリム化。

常磐自動車道の4車線化で橋づくりの技術進化を知る

2日目は、いわき震災伝承みらい館の武田さんから勧められた観光スポット「ワンダーファーム」を目指し、ホテルから国道6号線を北上した。しかし、常磐自動車道の4車線化事業で新たに造られたPC橋があると聞いていたので、どうしても見ておきたいと思い、先に立ち寄ることにした。

常磐自動車道では、渋滞による速度低下の緩和、事故削減、災害時や事故発生時の交通の確保を目的に、いわき中央ICから広野IC間の約27kmの4車線化事業が進められ、2021年6月13日に開通した。この区間は、山間部を通過するため、22もの橋梁が造られ、総延長は6kmを超える。最大橋長を誇るのは折木川橋の711・5m。そのほかにもJR磐越東線を横過する常磐夏井川橋は444m、仁井田川橋の438mと長大橋が多い。

いわき四倉IC近くに新たに完成した仁井田川橋に到着し、車から降りて近づいてみた。橋梁は桁橋とラーメン箱桁橋を組み合わせた構造で、4車線化のために整備された新しい車線では箱桁に波形鋼板ウェブを採用して、上部構造の軽量化を図った。

▲ ワンダーファーム
トマト栽培の6次産業化施設。自称「日本一のトマトオブジェ」や工事中に出土したトマトのような丸い石を祀ったトマト神社などユニークなスポットが点在する人気の観光施設。

トマトの6次産業化で近隣農家と新たなチャレンジを

再び、北上していわき四倉IC近くにある「ワンダーファーム」に向かった。この辺りはトマト栽培が盛んで、のどかな田園風景には大きなビニールハウスがあちこちに建つ。なかでも「ワンダーファーム」は、トマトの6次産業化をテーマに取り組んでいるそうだ。

全国第3位の面積を持つ福島県は、国内有数の農業王国。しかし、農作物の栽培だけでは経営が厳しく、かつ震災の影響で窮地に立たされた。そこで、自分たちでつくった農作物を一番おいしい状態で加工して付加価値を高めて販売する施設を開業。近隣農家と新たな挑戦ができる「地域農業のハブ」を目指す。

青々とした芝生が広がる敷地には、石窯焼ピザが名物のレストランやマルシェなどがあり、隣接のハウスではトマト狩りを体験できる。店内で色とりどりのミニトマトを量売りしていた。購入して食べてみると噛みしめた瞬間、ジューシーな甘みが溢れてきた。それぞれに食感や味わいが違う、美味しいトマトを全国の人たちに知ってほしいと思った。

地域経済と農業を支援する復興メガソーラー発電所

国や自治体、民間企業が一体となり、県内各地で新たな産業創出の動きが活発化している。浜通り地域及び周辺エリアでは、「福島イノベーション・コースト構想」を掲げ、最先端分野におけるプロジェクトが進行中だ。その一つである「大熊町ふるさと復興メガソーラー発電所」を見学することにした。

いわき市から車で約30分、福島第一原子力発電所が立地する大熊町は震災直後、全町民1万1505人が町外への避難を余儀なくされた。その後、除染が完了した大川原地区と中屋敷地区を

▲ **大熊町ふるさと復興メガソーラー発電所**
2015年12月に運転を開始した発電所は、約3.2haの敷地に7704枚もの太陽光パネルを設置。広大な敷地の除草作業を軽減するため、6種類の除草シートを敷設して、その効果を長期的に検証している。

復興拠点とし、集中的にインフラ整備・生活基盤の再生を実施。震災から8年経った2019年4月、ようやく避難指示が解除された。

なかでも田園地帯が広がる大川原地区には、地権者から借用した約3・2haの土地に太陽光パネルが設置され、2015年12月から運転を開始。想定年間発電量は、約600世帯分の使用量にあたる2200MWhにのぼる。

現在、固定価格買取制度(FIT)により、国が再生可能エネルギーで発電した電気の買い取りを保証しているが、買取期間は20年。その後の運営が課題になっている。担当者の話によると現在の大熊町の人口は震災前の10分の1程度で、大半が65歳以上。若い人たちに戻ってきてもらうには、雇用の創出が一番の課題だという。2021年から一部の敷地では、農業再開に向けた作付け実証が始まり、今後はエネルギーと農作物を自給できる活力ある地域への再生を目指している。

町の復興のシンボルである「道の駅なみえ」でご当地グルメを

お昼が近づいたので、大熊ICの先の浪江(なみえ)IC近くの道の駅へと向かってみた。

浪江町も町内全域に避難指示が出され、2万1542人・7671世帯の全町民が町外に避難。2013年4月に空間放射線量が低い順に3つの区域に分けられ、避難指示解除準備区域と居住制限区域では、2017年3月末に避難指示が解除された。とはいえ、2021年9月末時点で居住人口は1727人・1087世帯に留まっており、未だに多くの町民が避難生活を送っている。

国道6号と浪江町役場周辺を「復興の核となるエリア」と定め、町の復興のシンボルとして2020年8月に誕生したのが、「道の駅なみえ」である。地元のグルメを楽しめるフードテラス、野菜や海産物、名産品を扱う直売所のほか、交流サロンなど地域の人たちが集い、新しい挑戦ができる環境を整えている。

震災から2年後に再開された請戸漁港で水揚げされた釜揚げしらす丼や海鮮丼をはじめ、豊富なメニューから選んだのは、ご当地B級グルメの「なみえ焼きそば」。もっちりとした極太麺と豚バラ肉、もやしをラードで炒め、こってりソースで仕上げたシンプルな料理で、パンチが効いた味わいが食欲をそそる。

▲ **道の駅なみえ**
町の人たちの暮らしを支えるランドマークとして誕生。太陽光のほか、町内の「福島水素エネルギー研究フィールド」で製造された水素を用いて発電を行い、照明や空調などで活用し、スマートコミュニティの実現を目指す。

▲ **なみえ焼きそば**
昭和30年頃、一次産業が盛んな浪江町で「労働者のために安くて腹持ちのいい料理を」との想いで考案された。お皿には、縁起のいい9頭の馬の絵と「何事も馬九行久(うまくいく)」という文言が描かれている。

全面ガラス張りのテラスには、地域の方々が笑顔で楽しそうに食事をしていた。そこに陽光がたっぷりと差し込み、キラキラと輝く光景は、復興に向けた明るい未来を象徴しているように感じた。

相馬野馬追の舞台として有名な相馬中村神社へ

最後に訪れた相馬市は、宮城県に隣接した福島県北部のまち。千年もの歴史を誇る「相馬野馬追(そうまのまおい)」が有名で、国指定重要無形民俗文化財に指定されている。毎年7月の3日間、総勢約400騎余りの騎馬武者が、先祖伝来の旗指物をなびかせ、勇壮な戦国絵巻が繰り広げられるそうだ。

相馬氏は、鎌倉時代末期に奥州行方郡に移り住んで相馬地方を統治。東北には伊達家などの名門武家が勢力を誇示していたが、いくたびの危機を乗り越え、明治までの約700年にわたり、この地を守り続けた。相馬中村神社は、18代当主・顕胤(あきたね)が建立し、相馬家代々の氏神として崇敬されている。

神社に訪れると入口では、躍動感あふれる狛馬の像が参拝者をお出迎え。大きな鳥居をくぐり、石段を登ってい

▲ **松川浦大橋**
主塔から斜めに張ったケーブルで支えるPC斜張橋。震災から6年後の2017年4月から一般車両の通行が可能になり、ライトアップが再開されて松川浦漁港の復興のシンボルとなっている。橋長286.6m。

▲ **相馬中村神社**
本殿・幣殿・拝殿が国の重要文化財に指定される相馬地方の代表的な古建築。欅をふんだんに使った権現造り。相馬野馬追では、総大将の出陣式の舞台となっている。

た先には、国の重要文化財に指定される社殿が、荘厳な雰囲気を醸し出す。小高い丘に建つ神社の境内からの見晴らしはよく、周囲の街並みを眺めながら心地よい達成感を覚えた。

迫る津波や震災に耐えて 今もその姿を残す松川浦大橋

相馬市の絶景スポットといえば、太平洋に面した県内唯一の潟湖である松川浦。海と湖を仕切る約6㎞の砂州や中洲に広がる松林、小島が点在する風光明媚な景観は、日本百景に選ばれている。

ここにそびえる松川浦大橋は、航路を跨いで松川浦漁港のある本土と砂州を結ぶ道路橋。大型漁船の航路を確保するために桁下の位置を高くし、PC斜張橋の形式により桁高を低くして周囲の景観に配慮した。

震災では、9m以上の大津波により海岸堤防が約350mにわたり破堤し、漁港や住宅、道路なども甚大な被害を受けたが、桁下が10m近くある松川浦大橋は唯一、津波に耐えて残った。相馬市伝承鎮魂祈念館で当時の映像を見たが、何度も繰り返して津波が襲い、建物が破壊され、車両や船舶が打ち上げられても橋はびくともしなかったそうだ。その勇姿に心が深く動かされた。

帰路は福島から新幹線で東京に戻るため、相馬市と福島市をつなぐ相馬福島道路（国道115号線）を利用した。2021年4月24日には約45㎞の全線が開通し、所要時間が約45分短縮。中通りと浜通りの地域産業の活性化や観光振興に貢献するものと期待されている。

福島駅に到着し、最後に福島の美味しい食を求めてステーキ専門店に立ち寄った。福島牛は、きめ細かな霜降りが特徴で、赤身と脂身のバランスもいい。口の中でとろける食感と上品で豊かな味わいを堪能しながら旅を振り返った。

福島に訪れて、震災の被害状況を目の当たりにし、自分の命と生活を守るために日頃から防災意識を持つことの重要性を改めて感じた。「災害は他人事ではない」という言葉は心に深く響いた。

震災から約10年、交通インフラが整備されて地域が賑わいを取り戻しつつある。「新生ふくしま」に向けて挑戦を続ける人たちに触れ、将来への希望を感じることができた。その一方で、浜通りの観光客数は震災前の約7割の水準に留まっており、また、いまだに帰宅困難区域が残されているなど、本格的な復興に向けて、多くの課題が残されていることも事実である。整備された交通インフラを活用し、本来浜通りの有する豊かな観光や食の魅力が地域活性化にさらに生かされるとともに、再生可能エネルギーの推進や農業の6次産業化など、若者の定着を促す産業の創出が必要であると強く感じた。

復興は現在進行形だ。これからも福島の震災のことを忘れず、ずっと見守り続けていきたいと思った。

▲ **相馬市伝承鎮魂祈念館**
震災によって失われた相馬市の原風景や震災の記録を伝えるための施設。松川浦の美しい海を臨む敷地には犠牲者の名前を刻んだ慰霊碑が建つ。

▲ **福島牛**
盆地が多い福島県は、夏冬の寒暖差が大きいため牛の飼料となる農作物が美味しく育ち、山脈からの伏流水も豊富。最適な環境の中で育った福島牛は、くちどけがよくてさっぱりとした味わい。

福島 旅MAP

相馬福島道路
相馬市伝承鎮魂祈念館
相馬中村神社
相馬IC
桑折JCT
南相馬IC
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
松川浦大橋
仁井田川橋
小名浜マリンブリッジ
富谷JCT
利府JCT
仙台南IC
仙台若林JCT
東北横断自動車道
村田JCT
赤湯
高畠
白石
福島JCT
福島
会津若松IC
東北縦貫自動車道
郡山JCT
郡山IC
郡山
東北新幹線
常磐自動車道
浪江IC
道の駅なみえ
大熊IC
大熊町ふるさと復興
メガソーラー発電所
東北縦貫自動車道
いわき四倉IC
ワンダーファーム
いわきJCT
いわき震災
伝承みらい館
岩間防災緑地
新白河
那須塩原
① 伊達大橋
② 月舘高架橋
③ 当保志橋
④ 布川大橋
⑤ 犬飼大橋
⑥ 新熊屋敷橋
⑦ 西楢這橋
⑧ 物倉大橋
⑨ 横川高架橋
⑩ 今田高架橋